

がんセンターたより

就任のごあいさつ

神奈川県立がんセンター
病院長に就任して

病院長 大川 伸一



こんにちは。今年度から病院長になりました大川と申します。私は平成元年の6月に県立がんセンターに赴任しましたので、今年で27年間も同じ職場に勤めていることとなります。

病院長に就くにあたって、この27年間をざっと振り返ってみました。平成一桁の頃、つまり最初の約10年ですが、世の中はバブル景気はじめてその後の長いデフレに入って行った時代でした。それでも最初の数年はまだバブルの名残が残っており、人々の頭の中も派手な喧噪の時代から抜け出せないでいたように思います。医療も昭和の終盤と大きな差は無く、医療というのはお金がかかる、公的病院は赤字で仕方が無い、経営のことなど到底考えることはなく、経営効率などと言うことはほとんど意識にありませんでした。いや、もちろん上層部では違ったのかもしれませんが、その頃は若手の一臨床医だった私や、周りの先輩や同僚の意識には日常の医療を行っていく中で経営の二文字はありませんでした。患者さんは入院して来ても目的の治療が始まるまでゆっくりと療養して、さてそれから、と言うような感じでした。今ですと7日で退院できる診療内容も30日くらいかけていたと思います。その頃の患者数、特に新患の患者数は今の半分強くらいでした。さらに当時はがん以外の患者さんも多かったため、業務量は今の半分弱だったのではと推定します。病棟の看護師さんや仕事を共にする仲間と夜の飲み会も結構ありましたし、それも時には遠くまでビールを飲みに行っていました。

平成10年代は医療が変わり始めた時代でした。EBM、つまりエビデンスに基づいた医療が最も科学的で大事であり、専門家や重鎮のご意見や判断などは、昔はありがたく感じたのですが、それらはエビデンスが無いことが多く、だんだん軽く見られるようになりました。医療機器の進歩も急速ですが、医療の姿勢も大きく舵を切った時代です。例えばパスが普及し出した

のに伴い、平均在院日数の短縮状況が起こり始めました。短い期間で患者さんが退院すると当然次に入院してくる患者さんが居ます。パスの導入、セット化の普及により主治医による医療の違いが少なくなりましたが、同時に日々チェックとクリアすべき目標に追い立てられるようになってきました。また平成11年に全国数カ所で重大な医療事故が起こり、医療安全が本格的に研究され実践されだしました。さらに平成15年に個人情報保護法が制定され、患者データなどの取り扱いが厳しくなり、この頃から看護師や勤務医を始めとして医療に携わる職業がとても過酷だと言われる様になったと思います。

そして平成20年代に入ると、この傾向に拍車がかかります。平均在院日数はさらに短くなってきました。以前のように40日が20日になるのもすごい短縮ですが、それに比べて20日を、そして15日を切ったからの1日1日の短縮はもっときつく感じられます。また医療の進歩に伴い、患者さんの要求水準も上がります。まじめな日本の医療者は、行すべき事の多さと重さをかかえて日々めまぐるしい業務を行うと言う、大変厳しい時代になっていきました。このままではいくら業績を上げても、1人1人が達成感や満足感を得られず、ただ使命感でがんばるけれど、やがて消耗してしまうのではないかと危惧されてきました。

さてこれからの医療はもっと大変になるのでしょうか？ しみなさん、あまり悲観的になる必要はありません。医療者の悩みを解決していく方法はあると思います。まず医療にとって一番必要なこと、そして大切なことは何でしょうか。答えは分かりやすくシンプルです。それは病む人のために尽くすこと、支えになることに尽きるでしょう。このことをいつも忘れずにいながら、その上で患者さんの「ありがとう」という言葉、ご家族の「感謝します」と言うご挨拶を聞けば、疲れも癒やされます。人のためになっている、と言う実感を得られればきつくて多忙な仕事も続けられます。さらに職場の同僚、上司、後輩から褒められたり、頼りにされたりすると喜びを感じるでしょうし、またこの仕事を続けていこうという気持ちになると思います。このように人は自分のために生きようとしても限界が見えてしましますが、他人のためになっているという実感が持てて、

かつ自分の存在価値を意識することが出来れば、気持ちの維持に持続性を持たせることが可能になると思います。

病院長になって最初の年の一番の目標は、「明るい職場作り」だと思っています。深い悩みと心配と苦痛をかかえた患者さんを迎えるのは、明るい病院であるべきではないでしょうか。そうすれば患者さんやご家族もより素直に自然に感謝の気持ちを述べてくれるようになると思います。また仕事の仲間も周りに声をかけやすくなると思います。では、どうすれば明るい職場が築けるのか、についてはいろんな案がありますが次の機会に述べたいと思います。さらにまた私も一生懸命考えて行きますが、このテーマは働く1人1人の方にも考えていただきたいなあと願っております。

まずは長い文章をお読みいただきましてお疲れさま！、そしてありがとうございます。

副院長就任のごあいさつ

副院長 伊藤 清子



このたび副院長を拝命いたしました伊藤清子です。これまで看護師として、こども医療センター、がんセンター、循環器呼吸器病センターと3つの県立病院で経験を重ねてまいりました。多くの人に出会い、育てていただいたことに感謝し、役割を担ってまいりたいと思います。

勤務していた4年前とは大きく変わり、新病院となったがんセンターは、免震構造や重粒子施設など最新の設備と医療機器を備え、安心のがん診療連携拠点病院となりました。神奈川県のがん医療の中核機関としての期待を背負い、高度で心あたったかい医療を提供することが求められています。職員もスペシャリストが多く、毎日献身的なケアが実践されています。さらに今年度は、新たにアピランスセンター（がんに関する外見上のケア）とリハビリテーションセンターが設置されました。がんと共に生きる患者さんへ、より多様なチームで支援ができるよう努力してまいります。

質の高い医療を提供するために、私が大切だと思っていることが2つあります。1つは、チーム医療です。多くの専門家が揃っていても、総合力がなければ、患者さんにとって安心な医療を提供することはできません。チーム医療の鍵は、職種や職位を超えて「信頼」「尊重」「慮る」という心で医療を提供することだと思っています。2つめは、職員の健康管理です。専門性が高く使命感があるほど、勤務時間を超え働きすぎてしまいます。しかし、患者さんにとって安全・安心な医療は、職員が健康であることが前提です。

食事・睡眠・休養、人としてあたりまえのことを大切にしたいと思っています。職員ひとり一人の元気や幸福感が、患者さんへの心あたったかい医療や、仲間をいたわり大切にすることにつながると信じているからです。

これまで多くの先輩が守り育てたがんセンターの伝統を大切にしながら、さらなる医療の質向上を目指して、より多くの皆様に安心の医療が提供できるよう努力してまいります。

研究所長に就任して 臨床研究所長 小林 寿光



この4月1日をもって、神奈川県立がんセンター臨床研究所長を拝命した小林寿光です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

ところで私は元々外科医を志し、その後気管支鏡に係わる診療を経て、何故か医療機器開発と研究開発支援を行ってきた者であり、実は臨床研究所とは最も遠い人間と自覚しておりました。そのため最初に土屋理事長からお話があった時点では、非常にありがたいことではありましたが、かなり困惑しておりました。

そもそも私が基礎研究に係わったのは80年代の終わりの一瞬であり、二度と基礎研究をすることは無いであろうと思っており、また実際にありませんでした。その様な私が、1986年から30年余りの歴史のある当臨床研究所に迎えられた？ということは、非常にありがたいことであると共に、前述のように戸惑いを隠し得ないのが自他共に認める事実かと存じます。

ところで当臨床研究所が開設された当時と比較して現在のがん診療は大きく進歩し、その中で基礎研究が果たした役割は少なくないと考えられます。なによりも基礎研究が実際の治療薬や治療戦略に繋がっていることはすばらしく、その点で病院に併設された研究所には適切な存在意義があったと考えられます。

その一方で、がんの解明が進み種々の薬剤等が企業によって開発されている現在、病院併設の基礎研究所の存在意義は少なからず変貌したと考えられます。特に昨今の経済状況において国民医療費が40兆円を越えているなど、無視できない問題が数多あると考えられます。そのような状況で当臨床研究所の存在意義を問われた結果の一つが、今年度から当臨床研究所が病院組織の一つとなったことかもしれません。

定款に定められているように神奈川県立病院機構の目的は、神奈川県における保険医療施策として求められる高度・専門医療等の提供、地域医療の支援等を行うことにより、県内医療水準の向上を図り、もって県民の健康の確保及び増進に寄与することであり、これ自体は変わっておりません。そこでこの趣旨及び社会

状況を十分理解し、目的達成のために当臨床研究所内外の方々と共に種々尽力していこうと考えております。暫しはその適切なあり方を求め紆余曲折することもあるかと存じますが、皆様の暖かいご指導とご鞭撻を賜りたく、末永く臨床研究所をよろしくお願ひいたします。

院長補佐就任のごあいさつ

院長補佐 兼 消化器外科部長
兼 医療管理部長 吉川 貴己



4月より「院長補佐 医療安全」を担当することになりました、消化器外科の吉川貴己です。これまで、現場の人間として「難題」に会った経験もあり、私が指名されたのかもしれない。今で言えば「院内暴力」の患者対応、今で言えば医療事故調べの報告となる「予期せぬ処置中の死亡事例」などです。このような「難題」に対し、担当の大川先生（現 院長）は、理論的に整理して適切な方向性を示し、精神的にもサポートしてくれました。何と心強かったことか。印象的な両事例ともに、「将来のある若い医師」に過度な負担を強いることなく解決できました。このたび、「医療安全」を担当することになり、はじめに考えたことは、大川先生が私たちを守ってくれたように、「職員を守る」ことだと思っています。誠実に医療業務を行っていたとしても、不幸にして「難題」に巻き込まれることは、どんな職員にとっても避けられません。「真実を明らかにする」「誠実に伝える」ことで、多くの「難題」は解決でき、その結果、「職員を守る」ことができるのだと思います。

一方で、「重大な医療安全」を予防するためには、「システム」を整備することが重要です。「To error is human.」ヒトは間違いを起こします。Heinrichの法則によると、1つの重大な医療事故の背景には29の軽微な事故があり、更にその背後に300のヒヤリハットがある、とされています。これまでに報告されてきた「重大な医療事故」のほとんどすべては、「システム上の欠陥」が原因とされています。1人1人のミスが単独で「重大な医療事故」を引き起こすことはほとんどありません。「重大な医療事故」を予防するためには、「軽微なヒヤリハット」を振り返り、「重大な医療事故」に繋がる「Hall」を塞いでいくことだと思っています。職員の皆さまにおかれましては、いつも、「ファントルくん」を活用頂き、まことにありがとうございます。今後も、継続して、報告を頂ければ、と思っています。

「ローマは一日にして成らず」で、「医療安全」も日々

の積み重ねです。私もまだまだ若輩者ですが、「職員の皆さまを守る」ために、日々、勉強し成長していきたいと思ひます。今後とも、どうぞよろしくお願ひ致します。

院長補佐就任のごあいさつ

院長補佐 兼 腫瘍内科部長
酒井 リカ



皆様、こんにちは。平成28年度4月から院長補佐に就任いたしました酒井リカです。今年度より、森本、吉川、酒井の3名で、大川病院長が昨年度まで副院長として行っていた業務を分担して担当するように仰せつかりました。私の担当は医療局になります。医師の所属する部門のまとめ役として医療局内外の調整が主な仕事になり、身が引き締まる思いで日々を過ごしています。

さて、ここで私の経歴を簡単に紹介させていただきます。平成3年より3年間、当院のレジデントとしてお世話になり、腫瘍内科医としての基本を学びました。その後、藤沢市民病院等での診療経験の後、平成18年より2年間の当院血液内科での勤務、その後、横浜市大市民総合医療センター血液内科（無菌室）での4年間の勤務を経て、平成23年より腫瘍内科部長として3度目の当院赴任となり、現在にいたります。レジデント時代も併せると延べ11年間、神奈川県立がんセンターにお世話になってまいりました。

私がレジデントであった4半世紀前と比較しますと、医療は目覚ましい進歩を続けています。一方で、日本社会は少子高齢化という未曾有の問題に直面し、医療を取り巻く環境も変貌しつつあります。当院においても、時代が求める理想の病院の姿に向かい、模索の日々が今後も続くものと思われまふ。私たちの病院は地域および都道府県がん診療拠点病院として、高度ながん診療の提供が求められています。これに答えるためには、限られた入院ベッドの有効活用が必須であり、入院期間の短縮に向けた周辺医療機関との連携の更なる充実への取り組みや、増加しつつける外来化学療法を安全に遂行するためのチーム医療の質の向上とシステムの拡充は、当院において引き続き大きな課題です。部門横断的な有機的關係が構築され、個々の努力が効率的に反映される病院をめざして、また、患者さんも医療スタッフも笑顔で過ごせる病院であり続けられるよう、皆様と一緒に頑張っていきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

院長補佐就任のごあいさつ

院長補佐 兼 消化器内科部長
兼 治験管理室長 森本 学



「さらなる患者満足度向上を目指して」

このたび吉川先生、酒井先生とともに院長補佐を拝命致しました。引き続き消化器内科肝胆膵部長の職を継続させて頂くとともに、このたび新たに治験管理室長も拝命致しました。若輩ではありますが、御指導、御鞭撻を頂きながら頑張りたいと思いますので何卒宜しく御願い申し上げます。

院長補佐として「コンフリクト」と「教育」を担当することになりました。「コンフリクト」は「対立」「紛争」を意味し、一般的な会社組織においては必ずしも“悪”ではなく、「コンフリクト・マネジメント」は組織にとって前向きなプロセスの一つとも考えられていますが、病院組織においては一般にネガティブな内容です。「コンフリクト」の多くは、スタッフ对患者さん、あるいはスタッフ同志の事案で、その多くは小さな「トラブル」「クレーム」から始まります。こういった「トラブル」「クレーム」が、裁判などの法的手段に訴えられる前のステップで介入していくことが重要と考えます。事が大きくなると、個々の患者さんやスタッフにとって時間的・精神的に多大な負担となり、病院にも損失となることは明らかです。

「コンフリクト・マネジメント」の一つとして、「医療メディエーション」が普及すると良いのではと考えています。「メディエーション」は、「接遇」とは異なり、人と人との対話をすすめることを基本とする手法です。紛争構造の分析や対話促進技法などの理論的裏付けに基づいたもので、単なる訴訟回避策ではありません。すでに必須のアイテムと考える医療施設も多く、スタッフ全員がメディエーション研修受講義務化というところも少なくありません。当センターも「メディエーションマインドの行き届いたがん専門施設」を目指してはどうでしょうか。

「コンフリクト・マネジメント」がうまく進むと、最終的には「顧客（患者）満足度」の向上につながると考えます。「患者満足度」は単に新薬を揃えることや最新の医療技術を提供することだけでは得られません。当センターにとって、これから更に紹介リピーターや新たな紹介率を増やしていくために、コンフリクトの面から頑張っていきたいと思いますので、皆様宜しく御願い致します。

副看護局長就任のごあいさつ

副看護局長 山口 いずみ



この4月1日に精神医療センターより、異動してまいりました副看護局長（業務担当）の山口いずみです。がんセンターでの勤務は、今回の異動で3回目とな

ります。直近の勤務は5年前になりますが、がん医療がめざましく進歩するなか、がんセンターに求められるものは高く、「質の高い医療・看護の提供」と「経営の効率」という難しい課題を抱えていると日々実感しております。

過去2回の勤務において、がんセンターでの看護は、患者の人生にかかわることができ、やりがいを持って働くことができました。そして、一人の人間として、看護師としての成長を実感できた場でもありました。このように看護を実践できたのは上司、先輩や後輩に恵まれてきたからだ実感しております。まさに看護局ミッションとして掲げている、「がんと共に今を生きる患者に寄り添い、その人らしさを大切にしたい最良の看護を提供します」ということを経験することができました。このような経験を1人でも多くの看護師ができるよう、環境を整えていきたいと考えています。

しかし、配置されているスタッフには限りがある一方で、しなければならない・やりたい業務は山のようにあります。このような中で、チーム医療の一員として看護師が個々の能力を十分に発揮できるよう、他職種・業種と環境を整えていくことが副看護局長としての役割と考えております。頑張りたいと思いますので、どうぞよろしく御願いいたします。

副看護局長就任のごあいさつ

副看護局長 樋口 美佳



4月1日付で足柄上病院から異動してまいりました副看護局長（教育担当）の樋口美佳と申します。がんセンターには、平成18年1月から2年3か月間勤務していました。患者さんやご家族に「今できること」をチームで考え実践していた日々は、忙しいながらもとても充実していたことが思い出されます。8年ぶりのがんセンターは、最先端の医療機器を備えた新病院に生まれ変わり、患者数も年々増加傾向で県民の期待が高いことを感じます。

私が仕事をやる上で大切にしていることの一つに、チームワークがあります。先日、バレーボール全日本女子チームがオリンピック出場を決めました。世界のチームより10cmも平均身長が低い日本チームが目標を達成できたのは、個人の努力と戦略、そして、互いを認め合い共に目標に向かうチームワークがあったからだと思います。病院でも、医療チームがまとまらなければ患者さんに最善の医療は提供できません。看護師は、医療チームの中で最も人数の多い職種です。その看護師が、相手を思いやり自分の役割を果たすことは、チームの団結に大きく影響すると思います。看護師一人一人が、笑顔で最良の看護を提供できるように、教育的な観点からサポートすることが私の責務だと思っています。今は、慣れない仕事に周囲に支えていただく毎日ですが、明るく元気をモットーにチームの一員として頑張りたいと思っています。どうぞよろしく御願い致します。

新任の紹介

職員の異動がありましたのでご紹介します。

紙面の都合上、採用・就任された幹部職員、医師、放射線診断技術科部長、放射線治療技術科長、看護科長の紹介に限らせていただきました。

どうぞよろしくお願いたします。



幹部職員



病院長
大川 伸一



事務局長
山本 浩之



副院長
伊藤 清子



重粒子線治療
センター長
辻井 博彦



臨床研究所長
小林 寿光



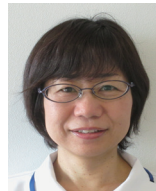
院長補佐
吉川 貴己



院長補佐
酒井 リカ



院長補佐
森本 学



副看護局長
山口 いずみ



副看護局長
樋口 美佳



副事務局長
遠藤 昇



医事課長
近藤 研吾

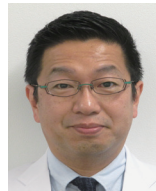
医療局



精神腫瘍科
部長
横尾 実乃里



リハビリ
テーション科
部長
水落 和也



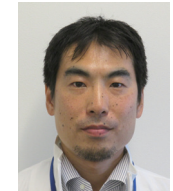
呼吸器内科
医 長
加藤 晃史



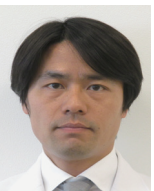
呼吸器外科
医 長
鮫島 譲司



血液内科
医 長
立花 崇孝



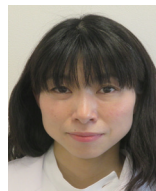
消化器外科
医 長
山田 貴允



消化器外科
医 長
稲垣 大輔



泌尿器科
医 長
梅本 晋



放射線診断
・I V R 科
医 長
山本 弥生



呼吸器外科
医 師
大澤 潤一郎



血液内科
医 師
小山 哲



腫瘍内科
医 師
小山 めぐみ





消化器内科
医師
芹沢 ありさ



消化器内科
医師
林 公博



消化器内科
医師
手塚 瞬



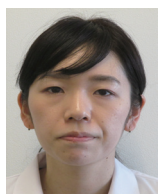
消化器内科
医師
戸塚 雄一郎



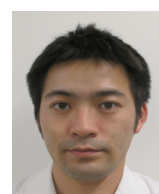
消化器外科
医師
村川 正明



消化器外科
医師
風間 慶祐



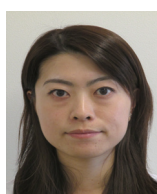
脳神経外科
医師
廣瀬 朋子



頭頸部外科
医師
松下 武史



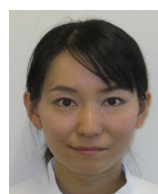
乳腺内分泌外科
医師
山崎 春彦



婦人科
医師
池田 真利子



泌尿器科
医師
安井 将人



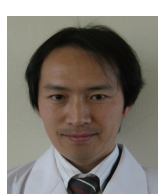
麻酔科
医師
秋本 香南



病理診断科
医師
鈴木 理樹



放射線診断技術科
部長
赤間 満博



放射線治療技術科
科長
井手 紳介



看護科長
得 みさえ



看護科長
沢山 ゆかり



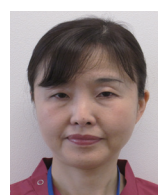
看護科長
今井 知子



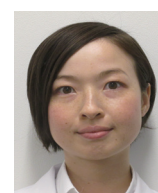
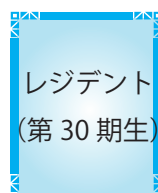
看護科長
舛田 佳子



看護科長
中村 佐知子



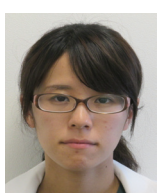
看護科長
西野 恵美子



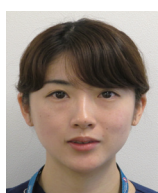
医師
上西園 幸子



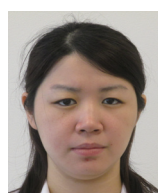
医師
高橋 亮



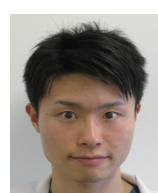
医師
三留 典子



医師
廣谷 あかね



医師
仁藤 まどか



歯科医師
是恒 秀一



第7回市民公開講座

「がんを知る」平成28年2月13日開催

多くの方々にがんに関する正しい知識を提供していけるよう平成21年にスタートしましたこの講座も、第7回目を迎え、今回は膵臓がん、食道がんを取り上げることとなりました。

第1部では小林先生、上野先生から膵臓がんの診断と内視鏡治療・化学療法について、森永先生から膵がん手術後の補助化学療法についての講演を行いました。

第2部では尾形先生から食道がんの診断について、西村先生から食道がんの手術以外の治療についての講演を行いました。

終了後のアンケートでは「多くの学びと気づきがあった」、「新しい取り組みを聞いて有意義だった」などの声をいただきました。

強い風が吹き荒れる1日でしたが、多くの方々にご参加いただき、大変有意義な講座となりました。（総務課）



第29回県民のための公開講演会が開催されました

臨床研究所 主任研究員 菊地 慶司

さる4月20日（水）、二俣川の旭区民文化センター（サンハート）ホールにて科学技術週間参加行事「県民のための公開講演会・難治性がん：最新の動向と治療の進歩」が臨床研究所の主催により開催されました。この講演会は今年で29回目になります。

150人を超える方々にご来場をいただき、肺がんや骨の肉腫などの難治性がんの発生の動向を研究所がん予防情報・成松宏人部長より、重粒子線や新しい分子標的薬剤による最新の治療法を呼吸器内科・山田耕三部長と骨軟部腫瘍外科・比留間徹部長より紹介させていただきました。アンケートの結果を拝見し、「がんがどのような病気なのか参考になった」「治療の進歩に希望が持てた」などおよそ9割の方から好評をいただけてほっといたしました。



ご来場下さった皆様、演者の先生方と大川病院長をはじめご協力くださった関係者の方々に感謝いたします。また、今後もこのような講演会を通して県民の皆様にごがんの最新情報を的確にお伝えしていけるよう臨床研究所も努力して参ります。



平成 27 年度

患者満足度調査の結果をご報告いたします。

平成 27 年 10 ～ 11 月に、患者さんへの満足度調査を実施いたしました。

入院患者さんには、10 月 26 日（月）～ 11 月 6 日（金）の 2 週間で、600 名の方にアンケート調査票を配布し、292 名の方から回答をいただきました。

外来患者さんには、10 月 26 日（月）～ 29 日（木）の 4 日間で、1,100 名の方にアンケート調査票を配布し、1,062 名の方から回答をいただきました。

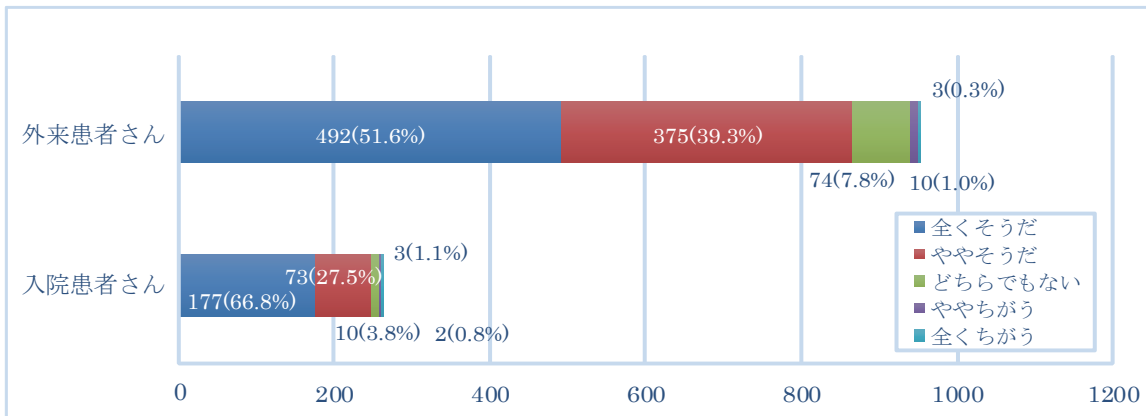
病院全体の評価は、入院が外来より満足度が高い結果となりました。

調査項目別では、入院時の説明や入院中の診療や医療スタッフについては概ね満足はいただきましたが、会計や施設・設備・情報提供に関しては十分に満足いただけていない結果となりました。

アンケート調査にご協力をいただいた患者さん、ご家族の皆様にお礼申し上げます。

1 病院全体の満足度

「全体的としてこの病院に満足している」の設問に、「全くそうだ」、「ややそうだ」と回答した割合は、入院患者さんが 94.3%、外来患者さんが 90.9%と高い結果となりました。



※ 回答数は、アンケート調査票を配布し、有効な回答として回収した数。

2 病院全体の評価（最大値：10 点）

項目	外来	入院
病院に満足している	7.0	7.9
病院を信頼している	7.3	8.1
家族、知人に勧めたい	6.7	7.6
医療サービスを高めるために、努力し向上している	6.6	7.9

3 患者満足度調査項目別集計結果（最大値：10 点）

項目	満足度
外来	
診察前(紹介、待ち時間、待合室環境)	5.3
診察や医療スタッフ(医師の診察、看護師の説明・処置)	6.5
検査(尿検査、血液検査、CT、MRI、レントゲン、処置・説明)	6.8
施設・設備・情報提供(診察室、院内設備、がん相談、情報提供)	5.5
会計(順番が公平・長く待つ、請求書、職員対応、自動清算機)	5.1
総合評価(病院全体)	6.7
入院	
入院時の説明等(医師説明、入院手続き、入院中生活説明)	6.8
入院中の診療や医療スタッフ(医師の説明・診療、看護師の説明・処置、介助等)	7.6
入院中の具体的な治療(検査、薬剤師・栄養士の説明・指導、手術、リハビリ)	6.8
施設・設備・情報提供(トイレ・浴室、病室内環境、エレベーター・階段、食事、がん相談等)	6.5
退院(退院説明、会計)	6.4
総合評価(院内仕組み、病院全体)	7.8

※満足度の考え方

各設問の回答項目「まったくそうだ」、「ややそうだ」、「どちらでもない」、「ややちがう」、「まったくちがう」の回答者数に対し、それぞれ 10 点、5 点、0 点、-5 点、-10 点を掛け、満足度を回答数で割った平均の数値。

アピアランスサポートセンター を開設しました！

平成 28 年 4 月から、当院にアピアランスサポートセンターが開設されました。

「アピアランス」とは、「外見上の」という意味です。

がん化学療法による脱毛や皮膚のくすみ、手術による影響など、患者さんは治療によって外見上の問題を抱えることがあります。このことにより、仕事や日常生活に影響し、治療による苦痛だけでなく、生活上の苦痛も体験することになります。

アピアランスサポートセンターでは、症状やその対処について基本的な情報を提供し、患者さん自身が対処することを支えます。

場所は、がん相談支援センターと同じエリアで、相談室の一室です。がん相談支援センターのがん専門相談員と協働して、総合的に患者さんの困りごとを助けます。院外の患者さんの相談にも対応します。

リハビリテーションセンター を開設しました！

がん治療は長足の進歩を遂げ、がんの生存率は格段に向上しました。このことは、がん治療を続けながら、また、がんによる様々な症状を抱えながら日常生活、社会生活を続ける方、すなわちがんサバイバーの増加を意味しており、我が国のがんサバイバーは 500 万人を超えているといわれています。がんは、局所の症状に加えて、気力、体力を消耗させる全身性疾患です。さらに、化学療法、放射線治療の結果として、手足のしびれ、筋力低下、関節の動きにくさ、食べにくさ、しゃべりにくさなどの多彩な症状により、日常生活に様々な影響を及ぼします。リハビリテーションは、がんに伴う諸症状の緩和、心身機能低下の予防、機能障害の速やかな回復、生活機能の維持、社会参加の支援などを目的とする専門職による治療であり、当院では平成 28 年 4 月に医師 1 名、理学療法室 1 名、作業療法士 2 名、言語聴覚療法 2 名の陣容でリハビリテーションセンターをオープンいたしました。心地よいリハビリテーションセンターで、活力を回復し、爽やかな笑顔と豊かな生活を取り戻しましょう。



リハビリカンファレンス



清潔で気持ちのいいリハ室

■ 平成 28 年度 ■ 臨床腫瘍セミナー

今年度も「臨床腫瘍セミナー」を開催いたします。予定表をご覧ください、興味あるテーマがございましたら是非ご参加ください。

また、院外の方で参加をご希望される場合は、事前にご連絡をお願いします。

会場 神奈川県立がんセンター
管理研究棟 5 階 大会議室
時間 18 時～ 19 時
対象 医療関係者
連絡先および問い合わせ先
神奈川県立がんセンター 企画調査室
電話 045-520-2267 (直通)

平成 28 年度 神奈川県立がんセンター 臨床腫瘍セミナー 予定表

日付	曜日	テーマ	所属	講師名 (敬省略)
平成 28 年				
5月25日	水	食道がん	消化器外科	尾形高士
6月 1日	水	悪性リンパ腫	腫瘍内科	酒井リカ
8日	水	白血病	血液内科	田中正嗣
15日	水	肺がん(診断と化学療法)	呼吸器内科	加藤晃史
22日	水	肺がん(外科治療)	呼吸器内科	伊藤宏之
29日	水	頭頸部腫瘍	頭頸部外科	古川まどか
7月 6日	水	早期胃がんのESD	消化器内科	井口靖弘
13日	水	肺がん(放射線治療)	放射線治療科	中山優子
夏期休暇				
9月 7日	水	重粒子線治療の基礎	重粒子線治療科	野宮琢磨
14日	水	大腸がん	消化器外科	樋口晃生
21日	水	脳腫瘍	脳神経外科	廣瀬朋子
28日	水	骨軟部腫瘍	骨軟部腫瘍外科	比留間徹
10月 5日	水	緩和ケア	緩和ケア内科	太田周平
12日	水	胆膵がん	消化器内科	小林 智
19日	水	がん免疫療法の現状と展望	免疫療法科	笹田哲朗
26日	水	顎骨壊死	歯科口腔外科	光永幸代
11月 2日	水	腎がん	泌尿器科	岸田 健
9日	水	せん妄	精神腫瘍科	横尾実乃里
16日	水	がんと静脈血栓	循環器内科	上野 淳
30日	水	胃がん	消化器内科	西村 賢
12月 7日	水	肝がん	消化器内科	守屋 聡
14日	水	腫瘍病理総論	病理診断科	河内香江
冬期休暇				
平成 29 年				
1月11日	水	子宮がん	婦人科	近内勝幸
18日	水	卵巣がん	婦人科	川野藍子
25日	水	膀胱がん	泌尿器科	梅本 晋
2月 1日	水	甲状腺がん	乳腺内分泌外科	菅沼伸康
8日	水	乳がん	乳腺内分泌外科	吉田達也
15日	水	未定	皮膚科	山本晃三
22日	水	乳がんの画像診断…乳房PETを中心に…	放射線診断・IVR科	山本弥生
3月 1日	水	がん治療合併症に対する漢方サポート	東洋医学科	林 明宗



放射線治療について

がん放射線療法看護認定看護師
大高 良子

放射線療法は、放射線治療機器の進歩により、以前よりも全身への有害事象が少なく、臓器の形態と機能を温存することができます。このことから、放射線治療をうける患者数は増加しています。しかし、照射をする部位に急性有害事象が生じるため、毎日治療を続けることは患者さんにとって容易なことではありません。そのため看護師は、患者さんの心身の状態を把握し、予定されている治療が受けられるように放射線治療の原理、目的、効果、有害事象の理解を深め、セルフケアができるように手助けをしています。

重粒子線施設が開院し、前立腺癌、骨軟部腫瘍の治療が開始されています。通常の放射線治療より患者さんのセルフケアが求められるため、その必要性を理解していただき、安全・安楽に治療が行えるようにしていきたいと考えています。



伊勢志摩で主要国首脳会議が開催され、オバマ大統領が広島を訪問された節目の年に、本号では新たな病院スタッフを紹介することができました。病院幹部各人の思いと気概あふれる挨拶に当センターの将来像が伺えます。来年度から始まる「次期がん対策推進計画」に向けて国レベルで準備が進められていますが、当院では新たに「アピアランスセンター」「リハビリテーションセンター」を開設しました。がん患者さん一人一人の期待と要望に応えるために、職員一同、一丸となって前進する「神奈川県立がんセンター」であることを本たよりから感じていただければ幸いです。(企画情報部長 金森平和)

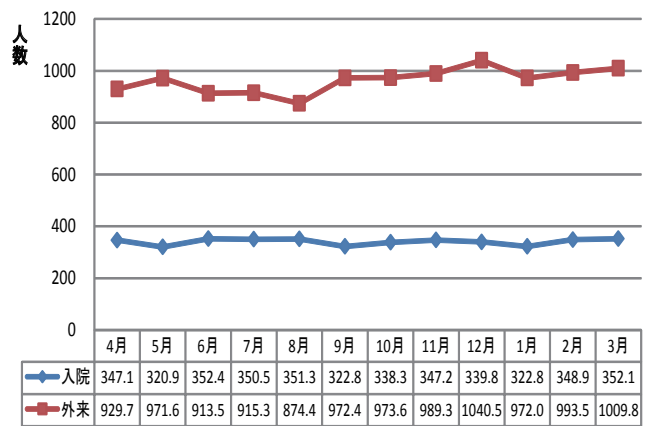
ボランティア会ランパスによる患者さんのための 7月・8月 木曜ミニコンサート予定表

時間：午後 1 時 30 分～ 2 時 (約 30 分)

7月 7日	声楽	斉藤 範子
7月 14日	琴演奏	琴結会
7月 21日	シャンソン	鈴木 陽子
7月 28日	ピアノ	坂本 里沙子
8月 4日	ピアノ	相沢 里沙
8月 11日	お休み	
8月 18日	ピアノ	佐藤 良美
8月 25日	ピアノ	須田 美穂



平成27年度1日平均患者数



編集・発行：神奈川県立がんセンター 企画調査室

〒241-8515 横浜市旭区中尾 2-3-2

TEL 045-520-2222 (代表)

<http://kcch.kanagawa-pho.jp/>

